

「コミュニケーション」のインレーション

橋本 みずき (明智町出身)

その瞬間は唐突に訪れた。最近付き合いを始めたばかりのクライアントの窓のない会議室で、気のいい部長さんに「なんだか閉塞感のある部屋ですみませんね。」と言われながら案内され、課題である企業のデジタル環境について話し始めた矢先だった。

最初はガタガタと部屋の家具やコーヒークップが音を立て、「あ、地震？少し久しぶり？」と心の中で思った程度だった。それにしても収まる気配がなく、同席していた数人の会議参加者たちと「ずいぶん長いですね。」と会話を交わし、気を利かせた部長さんが「まずはドアを開けましょうか」と、鉄と木の二重ドアを開けた瞬間、強烈なめまいのような横揺れが足元を襲った。

「危ない、下まで降りよう！」
部屋から飛び出すと目の前のエレベーターはガチャガチャ!!と今にも落ちんばかりの大きな音をたてて揺れている。取るものもとりあえず、私たちは脇にある階段を一心に下の階へと駆け降りた。

辛うじて一階までたどり着くと、同様に降りてきた人たちでホールはごった返していた。その中にいた人たちの中から口々に「危ないから外に逃げよう!」「外に逃げたほうがいい!」とい

う言葉が聞かれるのと同時に、大多数の人たちは玄関から道路へと飛び出していた。かつてテレビ番組で、大きな地震の際は、上から看板や割れた窓ガラスなどの落下物が落ちてくる危険があるから、不用意に外へ飛び出してはいけない、という話があったことを記憶していた私は、残った数人の人たちと玄関の内側から外の道路の様子を覗いた。その間も揺れは収まる気配はなく、目の前のトラックが明らかに前後に揺れているのが見え、初めてこれはたまたまではないということを確認した。今まで何度か地震は体験してきたが、大声で口々に何かを叫びながら周りのビルから飛び出ししていく人たちが、道路の中央分離帯に集中したおびただしい数の人たちの姿は、今まで経験してきたそれとは明らかに違う光景を作り出していた。まだようやく冬の寒さが和らぎ始めたところ、コートも持たずに飛び出してきた寒さと、この上ない恐怖で膝が震えているのを感じていた。一体どこで起こった地震なのだろうか? 岐阜の実家は大丈夫だろうかと、混乱のさなか様々なことが頭を駆け巡った。

ようやく揺れが収まり、一緒に会議室から逃げ出してきた人たちの無事を

お互い確認すると、すぐさま近くにいた人々が「震源は宮城らしい」と話をし出す。急速に普及したスマートフォンで、既に出始めている情報を調べているようだった。そこで私は自分の携帯すら持ってきていないことに気付いた。打ち合わせに出ていた人たちから「嫁の実家が福島で」とか「自分の実家が仙台で」と心配する声が聞こえてきている。

揺れが収まってからしばらくすると、自分がバニックから落ち着きを取り戻せたのか判別のつかない状態で、周りの人から「ひとまず部屋に戻りましょうか」という声が上がリ、私たちはもといた会議室へと階段を上っていった。するとところどころビルの壁にはヒビが入り、薄い塗装が剥がれ落ちて床に散らばっている。少し不安に駆られながらも、同席していた先輩は中断していた会議の話を再開し、一緒にいた人たちも気を取り直して議題に意識を向けた。

と、俄かに低い轟音と共に再度揺れが襲う。これもまた比較的大きな揺れだ。そこで部長さんから「やめましょう。やっぱりやるべきではない。一旦打ち合わせはしませんが。」との提案が出される。私たちは任務を背負って訪れていただけに、それを本当に中断してしまっていないのか、一瞬判別がつかず躊躇した。しかし部長さんの意思は明確だった。

これはただごとではない。

そこで私は会社の先輩・後輩と3人で、一旦クライアントのビルを出て会社に戻ることにした。まずは最寄りの地下鉄の駅へ向かうが、たどり着く前に付近にいた人々から動いていないという会話が聞こえてきた。JRならもしかしたら動いているかも、ということとで一路東京駅へ。しかしそれでも立ち往生した人がごった返していて、そこでどうやら都内近郊の交通機関が全面的に止まってしまっているらしいことを知った。改札は封鎖され、その中央に普段は壁際にひっそり置かれているモニターが設置され、現況を伝えるテレビ報道が流れていた。

また大きな揺れが襲う。金属がぶつかる激しい音がし、あちこち工事中の東京駅では、鉄骨の仮天井から下げられた工事用の電灯が振り子のように左右に大きく揺れ、今にも落ちんばかりの状態だ。咄嗟に上を見上げ、落ちてくるようなものがないか注意を払う。頼りない仮天井と工事用の白色のスチール壁に囲まれ、私たちと同様に駅で立ち往生した人々が一斉に身構えている様子が窺える。

しかし、そこで人々が右往左往する様子などほんの一部の混乱でしかないことは、この時には知る由もなかった。

一旦揺れが収まると、ふと岐阜の実家のことが頭をよぎった。このような状況下、とても携帯電話が通じるとは思えないが、まずは連絡してみないことにはと

思い、仕事用・プライベート用と2台ある携帯電話の、まずはプライベート用を手に取り実家の短縮番号「0番」を押す。当然のことながら掛からない。仕方がないのもう一台の、会社から支給されている仕事用の携帯電話を拝借する。しかしこちらも呼び出し音すら鳴らず、すべさまま話中の「ツッ・ツッ・ツッ…」という音がする。

駄目だ。この大都会のと真ん中で、交通も麻痺し、電話も通じないとなるとなす術がない。

そこで、私たちはタクシーを拾おうと大通りに戻った。当然ながら同じことを考える人たちが道路は埋め尽くされていて、逆に車はまばらにしか通っていないような状況だ。私は、「この状況を考えるときつと東京駅までタクシーで来て降りる人たちがきつといえるはず。方角的に、駅に向かう人が降りそうな信号手前に移動しよう。」と提案する。予想は的中し、1分も経たない間に2、3台のタクシーがやってきて、私たちはそのうちの一台を、前の客が支払いをしている最中に横に駆けつけて確保し、その客が降りると同時に急いで乗り込んだ。タクシーに行き先を告げ、汐留のオフィスへと走り出す。行き交う車は東京とは思えないほどまばらで、道路はまるで何かが不穏な出来事が起ころうとするSF映画の幕開けのワンシーンのように、人々の不安を表すよつな静寂に包まれていた。

△余談△

偉い人の格言によくある話ですが、(特に大都会では)大勢の人々に囲まれながらにして孤独である、という状況が本などで述べられていると思います。

この文章は今回の東日本大震災において起こる「陸の孤島」現象と、それによって露呈する「都会の孤独な人々の姿」を通して、離れて住む家族との絆を描くストーリー(の予定)です。

橋本みずき (はしもと・みずき)

明智町出身のシンガー／ソングライター。2005年「愛・地球博」や地元「大正村」でのイベント出演のほか、NHK紅白歌合戦のオリジナルキャラクター「ウタ・ウッキー」の絵かき歌はなまるマーケット内インフォマーシャル「はなまるクエスチョン」の作曲など幅広い活動を行っている。

<http://www.mizukihashimoto.com/>



「状況描写」に写真を入れると読者がそれぞれに描き出す情景を限定してしまうとの筆者の意図で敢えて写真は、この一枚を除き掲載していません